

アマリア

謎めいた解釈

私にとって精神分析のもっとも素晴らしいところのひとつは、サイコセラピー（心理療法）とはちがって、自我に狙いを定めていないこと、自我の次元で作用しているのではないことがあります。患者が精神分析家の解釈を理解することは、必要なことではありません。患者がそこで認めることが必要だということでもありません。肝心なことはべつのところにあります。

私の経験からその例をお話します。私は将来、心理学分野でやっていこうと決めていて、すでに分析を始めていた頃のことです。カトリック教育を受けていた私は、まだその宗教になにがしかの愛着がありました。私とカトリックとの関係は、もはやしつこい疑いによってのみ保たれている状態でした。頭では、自分はもう宗教のターゲットではないのだと分かっていたのですが、しかしながらミサに行く習慣はまでもっていました。私はただ宗教曲を歌うことのためにのみ、ミサに通っていました。

分析家にその話をしました。分析家は私に解釈を与えたのですが、それは私にとって謎めいたものでした。分析家は言いました。「神への、声」、と。この解釈は私の行動に意味を与えるものではありませんでした。その解釈は、そこで問題になっている「対象（＝声）」を、ただ指し示すものでした。

たとえ私には意味がわからなくても、効果はすぐにありました。私は教会に歌を歌いに行くのをやめたのです。宗教と私を結び付けていた疑いが、揺り動かされたのです。決定的に、後戻りできない何かが、私とカトリックの信仰心との関係を結んでいたひもを、ほどいたのでした。それが、分析がした主要なことでした。

分析は非常に個別的な体験です。人は分析でパロール（ことば）にかつてない接近を果たします。このパロールは、自我とはべつの、ある次元で、言われ、聞き取られます。それは行為のステイタスにかかわるものです。このようにして主体の人生にビフォーアフターが作り出されます。それがたとえば私の例でした。パロールはひとつの贈り物であり、その結果ももたらすものです。